

2022年度

愛知の総合学習

(第17集)

もくじ

I 教育課程編成活動について

- 1 総合学習における「ゆたかな学び」…………… 2
- 2 総合学習における教育課程編成…………… 3

II 第72次教育研究愛知県集会の動向…………… 5

III 実践報告（小学校における実践）…………… 6

豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会に参画する子どもの育成

— 『タニンゴト』を『ジブンゴト』としてとらえる実践を通して—
大島 俊介（海部・津島東小）

IV 本年度のまとめと今後の課題…………… 16

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会総合学習部会

2022年度 教育課程研究委員

ブロック推薦

◎部長 ○副部長

名古屋			尾張			三河		
氏名	単組名	学校名	氏名	単組名	学校名	氏名	単組名	学校名
小川久之	名古屋	東山小	渡邊彰二	春日井	高森台小	江崎 漠	豊田	小原中部小
近藤 駿	名古屋	大森中	赤塚祐城	一宮	大和西小	大河内航	碧南	中央中

第68次～第71次教育研究全国集会リポート提出者

68次			69次			71次		
氏名	単組名	学校名	氏名	単組名	学校名	氏名	単組名	学校名
◎酒向洋一郎	一宮	浅井中小	○佐々木章仁	豊橋	五並中	○大島俊介	海部	津島東小

・第72次教育研究全国集会リポート提出者 井口 晴渚（名古屋・黒石小）

I 教育課程編成活動について

1 総合学習における「ゆたかな学び」

グローバル化の進展や、絶え間ない技術革新、地球温暖化による気候変動、新型コロナウイルス感染症など、現在の社会は数年前からは想像もできない姿となり、まさに「予測が困難な時代」へと突入している。そのような社会の変革期の中で、子どもたちに身につけさせていかななくてはならないこととして、教科書の内容を理解するだけではなく、それぞれの教科の学びを子どもたちが生きる実際の社会と結びつけながら、目の前にある課題を解決していく資質・能力の育成が求められている。

こうした背景のもと、本年度、愛教組連合は第72次教育研究活動の重点として、「学びの質をより追究するとともに、子どもたち一人ひとりの意欲を大切にし、学ぶ喜び・わかる楽しさを保障する教育課程編成活動をすすめる」「学校・地域の特色を生かし、家庭や地域社会と協働をはかりながら、人・自然・文化などのかかわりを大切にしたい創意あふれる教育課程編成活動をすすめる」の2点を掲げている。

「子どもたち一人ひとりの意欲を大切に」することや、「学校・地域の特色を生かし、家庭や地域社会と協働をはかる」ことはこれまでも総合学習が中核として担ってきた学びの姿である。また、教科書の内容に留まらず、「人・自然・文化などのかかわり」を探究課題として扱う総合学習こそ、各教科の学びをつなぎ、子どもたちにとって真に「ゆたかな学び」を実現することに必要不可欠な領域であると考えられる。

そこで、そのような「ゆたかな学び」にむけて、総合学習として大切にしたい観点を以下のように考えた。

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」

総合学習は、予測が困難な時代において、持続可能な社会を実現するための資質や能力を育てることをねらいとしている。そのため、教科の枠にとらわれることなく、次のような資質・能力の育成に努めていくことが求められる。

- ・探究的な見方・考え方を身につける。
- ・自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を身につける。
- ・問題解決や探究活動に主体的、創造的、協働的にとりくむ態度を養う。
- ・自己の生き方を考えることができるようにする。

○「生きてはたらく力」を育むために

総合学習では、「生きてはたらく力」を育むために、以下6点を重点として考える。

- ・教科を横断する総合的な学習となるようにする
- ・体験的な学習を効果的に取り入れる
- ・協働的な学習になるように配慮する
- ・探究的な学習の過程にもとづいた単元を構想する
- ・他人事としてではなく自分事として向き合うことのできる探究課題を設定する
- ・地域や各校の特色などをふまえる

以上のことに配慮しながら、創意工夫のあるカリキュラムを編成することが大切である。

2 総合学習における教育課程編成

＜本実践について＞

本校の総合学習は、体験的な活動を重視したカリキュラムを中心に単元を構成している。年度が変わっても、総合学習の年間計画の流れはほぼ変わらないため、1、2年生の生活科含めた小学校6年間を見据えて系統的に作成している。本実践は、4年生のキャリア教育を取り上げている。他教科の学びや学校行事、インタビュー活動などの人とかかわりを通して、自分の将来について考えた。

第4学年 総合学習 単元計画（45時間完了）

「自分の将来を見つめて ～キャリア教育を通して～」

追究目標

自分の家族や都市部で働く人々への職業インタビューを通して、将来つきたい職業や自分の未来を考えることができる。

学習内容

手だて・教師の支援

他教科・行事とかかわり

第1次 家族の職業を調べよう（計12時間）

- さまざまな職業について知ろう①～②
 - 知っている職業名を発表する。
 - 知らない職業について調べる。
- 家族に職業インタビューⅠをしよう③～⑤
 - インタビューしたい内容を話し合う。
 - 職業インタビューをする。
- 職業インタビューをまとめよう⑥～⑩
 - 職業インタビューでわかったことを新聞にまとめる。
- 家族の職業を発表しよう⑪～⑫
 - 職業インタビューⅠでまとめたことを発表する。

・さまざまな職業について知るために、学習用タブレットを活用して、情報収集と整理を行う。また、インターネットの情報だけではなく、NIEの活動と関連付けて、職業について知る機会を増やす。

○国語科「たしかめながら話を聞こう」
・必要なことをよく知るための質問をしよう。
○国語科「みんなで新聞を作ろう」
・知りたいことが明確に伝わるように記事を書こう。
○道徳「気持ちを込めて」
A【努力と強い意志】
・家族の仕事への思いや働く理由を考えることを通して、仕事に目標や誇りをもって働く人への憧れや尊敬の気持ちをもつ。

家族以外の職業について視野を広げられるように、愛知県の県庁所在地である名古屋市について学び、都市体験学習の中で、職業インタビューⅠを行う。

第2次 働くことの大変さやすばらしさを知ろう（計15時間）

- 都市部について調べよう①～③
 - 愛知県の県庁所在地である名古屋市の位置、主な産業、交通網について調べ、愛知県の行政の中核になっていることをつかむ。
- 都市部で働く人について調べよう④～⑩
 - 業種別イメージマップから職業について考える。
 - 都市部ならではの職業について調べる。
 - 都市部の交通網から移動方法について調べる。
- 職業インタビューⅡをまとめよう⑪～⑮
 - 職業インタビューⅡでわかったことをまとめる。

・公共施設見学で質問する際に、より具体的な質問をするために、思考ツールを活用して質問を項目別に整理する。

○社会科「わたしたちの県」
・県全体の地形や位置、主な産業、交通網の様子などを理解し、特色を考えることができる。
○学校行事「都市体験学習」
・名古屋で職業インタビューⅡを行い、都市部で働く人について調べることができる。

職業インタビューⅠ・Ⅱを通して学んだことを生かして、自分が将来つきたい職業に興味・関心をもち、将来の自分についてのプランニングを考える。

第3次 これからの自分の将来を考えよう（計18時間）

- 将来どんな仕事につきたいか考えよう①～⑤
 - 今まで行った職業インタビューや仕事体験を生かし、自分がつきたいと思う職業を考え、詳しく調べる。
 - その仕事につくためには、どのようなことが必要なかを調べ、まとめる。
- 将来の自分をプランニングしよう⑥～⑯
 - 今の自分から中学生、高校生、成人まで、将来の夢へ向かっての過程を一年ずつ考え、プレゼンテーションにまとめる。
 - 学習発表会に向けて、準備をする。
- 将来の自分について発表しよう⑰～⑱
 - 学習発表会で、これからの自分について発表を行う。

・集めた情報を整理するために、思考ツールを活用する。そして、これまで学んだこととこれからの自分についてのプレゼンテーションを作成する。

○道徳「朝がくると」
B【感謝】
・家族が自分のためにしてくれていることは、どのような思いからかを考えることを通して、自分が家族に支えられていることに気付く。
○学校行事「学習発表会」
・これまでの感謝と自分の決意を、家族や友だちに伝えることができる。

第1次 家族の職業を調べよう

最初に、世の中にあるさまざまな職業について知ることから始めた。子どもたちは、学習用タブレット端末を活用し、自分が将来なってみたい職業や興味をもっている職業を中心に調べた。その際には、一つに絞って調べることをせず、幅広く調べるようにしたことで、今まで知らなかったような職業について知ることができた子が多くいた。次に、国語の学習で学んだことを生かして、家族インタビューを行い、保護者の仕事について調べることにした。その中から、自分が伝えたいことを家族新聞にまとめて発表した。活動を通して、職業についての視野を広げるとともに、家族が毎日朝早くから夜遅くまで働いてくれていることに気付き、感謝の気持ちをもつことができた。



【調べ学習の様子】



【完成した家族新聞】

第2次 働くことの大変さやすばらしさを知ろう

さまざまな職業を知ったところで、名古屋市まで校外学習に行く機会を利用して、動物の飼育員にインタビューすることにした。事前に質問したいことについて、思考ツールを活用して質問内容を分類し、その中から特に聞きたいことを整理した。校外学習時には、その質問をふまえながら飼育員の仕事について教えてもらうことができ、質問時間には個々で知りたいことを質問することで、より濃密な時間を過ごすことができた。この校外学習を通して、仕事の大変さを知ると同時に、仕事に対する思いや工夫について気付いた。そして、自分の将来についてより深く考えるきっかけとなった。



【飼育員さんの話】

第3次 これからの自分の将来を考えよう

これまでの活動から、もう一度自分の将来の夢について考える機会を設けた。第1次と変わらない子もいれば、いくつかある職業から変わった子もいた。そして、将来の自分のプランニングをし始め、今考えられる夢にむかっただけの過程を考えることにした。さらに、その内容から、「①自分の将来の夢について」「②夢にむけて、これからとりこんでいきたいこと」の二点をプレゼンテーションにまとめて、学習発表会で発表した。



【発表内容を整理する様子】

成果と課題

【成果】

単元構想を作成する際に、他教科や学校行事などと関連付けながら学習を進めていくことで、教育活動全体を通して学びを深めていくことができた。また、次年度以降に担当する教師も、この単元構想図を活用することで、学校として持続可能な実践を行うことができ、教員間での連携も図りやすくなると考える。

【課題】

総合学習に必要な探究の過程に沿って活動を設定し、さまざまな活動を行うことで、これからの自分の将来について考えることができた。より学びを深めていくためには、子どもたちが事前に ICT 機器の活用や思考ツールの使い方についての考えを深めることが必要であると考え。そうすることで、探究の深まりをより豊かにすることができると考える。

Ⅱ 第72次教育研究愛知県集会の動向

1 報告された内容について

- ・自己の生き方を見つめ直し、社会的・職業的自立にむけた力を育む実践（2本）
- ・地域とかかわり、地域への愛着を深める実践5本）
- ・SDGsや環境、防災など今日的な課題を扱った実践（8本）

今日的な課題や身近な事象を探究課題として取り上げ、カリキュラムを自主編成し、主体的に取り組む子どもの育成をめざした実践が多く報告された。また、コロナ禍という状況下においても、オンライン会議や授業支援ソフトを使用することで協働的な学びの実現をはかる実践や、思考ツールを活用することで、探究の家庭の一つである整理・分析をめざした実践など、直面している昨今の状況そのものを切実な課題として新たな学びのあり方を模索する先生の熱意に感心させられた。

2 討論の内容

(1) 子どもたちの声や願いを取り入れた総合学習にするための手だて

討論では、子どもたちの声や願いを取り入れるために、子どもたちにとって身近な話題を教材としたり、その教材との出会わせ方を工夫したりする必要があるという意見が出された。これらの意見をもとに、これまでの実践における教材との出会わせ方について、発表者の経験を交えて意見が交わされた。さらに、現地取材や外部講師の派遣、体験的な学びを通して、子どもたちに目の前の課題を自分事としてとらえさせることが必要であることが話された。また、子どもたちのつぶやきや振り返りをくみ取り、還元していくことが教員に求められる姿勢であるという意見が出された。助言者からは、子どもたちの思いや疑問こそが、総合学習の原動力であり、子どもたちが相手意識と目的意識を明確に認識することができれば、子どもたちが自主的に動き出す総合学習にすることができると助言を得た。

(2) 総合学習のカリキュラムのあり方と、総合学習の持続可能性

子どもたちの声や願いを取り入れた総合学習とするために、カリキュラムが必要かどうかについて、討論が行われた。カリキュラムがあることで、総合学習への不安が和らぐ教員がいる一方、カリキュラムにしばられると子どもたちの実態に応じた単元展開が難しくなる。子どもたちの主体性を守るためにカリキュラムを実践の途中で修正するゆとりをもつことが教員に求められている姿勢であるという意見が出された。助言者からは、めざす子ども像こそがカリキュラム作成の原点であり、年間の指導計画とは異なることが確認された。また他学級が異なるテーマで総合を行うことも考えられるので、学年でのめざす子ども像は、統一させる必要があると、助言を得た。

(3) 総括討論

子どもたちに自分の生き方を考えさせる視点からのテーマづくりや授業展開の工夫について話し合われた。子どもたちの実態からめざす子ども像を定め、子どもの関心や疑問を学習課題とし、子どもたちの声や願いをもとにした単元展開の重要性が確認された一方で、準備に労力がかかることや時間に限りがあること、教員間での意思疎通が難しいことなど、総合学習をおこなっていく上での課題についても意見が交わされた。助言者からは、子どもの声で学習をつないでいくために、毎時間の子どもの変容を評価する必要があると助言を得た。また、探究的な学習のサイクルを子どもたち自身で回させることができるように、教員自身が変化を恐れずにいなければならないと、助言を得た。助言者からは、教員間での情報交換や引き継ぎのしくみを整備し、実践そのものも持続可能にしていくことが必要であることや、AIやICT技術の発展がすすむ未来で求められるであろう、人とのふれあいや本物の体験活動を取り入れたカリキュラムを創造し、子どもの非認知能力を育むことができる教員が今後求められていくという助言を得た。

報告書の要点

SDGs の視点を取り入れた学習内容を扱い、時間・空間認識を育てる探究的な学習の展開を意識した授業をつくることを本研究の目的とした。SDGs の視点で、子どもが世界や日本の諸問題に向き合い具体的な行動を考えるなど、主体的に問題解決していく力を育てていくことを願い、本研究に取り組んだ。

本校の子どもたちは、世界の実情に対して「わたしは恵まれているから」という認識から、「世界に暮らす子どもたちは、わたしと同じ子どもである」という認識に変換する必要がある。また、子どもたちは、世界の課題を日常の学校生活と関連付けながら、多様な人々と協働することで課題に気づき、その解決策を考えていく必要があると考える。

そこで、「さまざまな協働の場面を設定して他者理解を深めたり、探究的な学習展開を取り入れたりすることで、世界の課題をジブンゴトとしてとらえ、向き合うことができる子どもを育むことができる」「持続可能な社会をつくるための土台を広げることで、学校全体の子どもたちの探究的な活動に対する意欲を高めることができる」の2点について仮説をたてた。

本研究で実践したジブンゴトとしてとらえる学習プログラムによって、子どもたちは課題に関心をもつだけでなく、自分たちにできることを意欲的に考えるようになった。そのことから、次年度は、子どもたちが世界の課題に対して、試行錯誤を粘り強く考え続けることのできる力を育てていきたいと考えた。「住み続けられる街づくり」というテーマで、自分たちの住む地域のよさに気付くだけでなく、地域の課題に対して当事者意識をもって深く考え、地域のためにできることをプロジェクトしていくことのできる子どもの育成をめざしていきたい。

1 主題設定の理由

(1) 社会情勢の側面から

文部科学省では、学校のカリキュラムの基準となる学習指導要領を定めている。2017年3月に公示された学習指導要領の前文に「持続可能な社会の創り手となることが求められている」と明示された。また、中央教育審議会答申に指導内容の示し方の改善として、時間、空間、相互関係などの視点に着目して考察・構想していくといった社会的な見方・考え方の必要性が述べられた。

2019年末から2021年にかけて、新型コロナウイルス COVID-19 が世界中で大流行し、わたくしたちの日常生活の自由を奪い、生命・健康そして人間関係を危険にさらした。しかし、経済活動の縮小は、貧困や格差などを拡大したものの、皮肉にも大量生産・大量消費の見直し、在宅勤務の導入や環境整備、温室効果ガスの削減などの副産物を生み出した。社会や人々の暮らしが大きく変革するなか、世界を本格的に持続可能な方向へと転換していくべきときがきているとも言える。

そこで、SDGs の視点を取り入れた学習内容を扱い、時間・空間認識を育てる探究的な学習の展開を意識した授業をつくることを本研究の目的とした。SDGs の視点で、子どもが世界や日本の諸問題に向き合い具体的な行動を考えるなど、主体的に問題解決していく力を育てていくことを願い、本研究にとりくんだ。

(2) 第6学年（一昨年度）の子どもたちとの実践から

津島市は、全国におよそ3000社ある津島神社の総本社があり、織田信長ゆかりの地として

知られている。また、日本一寺院が多い愛知県の中で「寺密度」が一番高い街である。津島神社で行われる尾張津島天王まつりや天王川公園で行われる藤まつりが有名で、毎年近隣の市町村からの観光客でにぎわう街でもある。

しかし、一昨年度受けもった第6学年の子どもたちは、歴史と観光でにぎわう街という認識ではなく、「ごみのポイ捨てが多い街」「公園が少ない街」という認識であった。そこで、自分の街に誇りをもてない子どもたちが多かったこともあり、「津島市をPRしよう」というテーマで、津島市の魅力を再発見することを目的に実践を行った。子どもたちは、津島市の歴史や伝統について、地域の観光交流センターの方や、伝統的な菓子をつくり続ける職人の声を聞いたことで、津島市に関心をもち、多くの人に津島市を知ってもらおうと思えるようになった。しかし、子どもたち自身が「未来を切り拓いていく」という認識をもつには至らず、これからも津島市に住み続けたいと考える子どもの数に大きな変化は見られなかった。

そこで、子どもたち自身が未来を切り拓いていく意欲をもたせることのできるような実践を行っていくことを自分自身の使命としてとらえ、実践にあたっていきたいと考えるようになった。

(3) 第4学年（昨年度）の子どもたちとの実践から

次年度受けもった第4学年では、環境をテーマに「発展途上国のごみ処理の問題」「プラスチックごみの問題」「食品ロスの問題」「環境破壊の問題」「生物の多様性」など、さまざまな環境に関係する問題を取り上げ、実践を行った。国語科や社会科、算数科、図画工作科などの学習と総合的な学習の時間を教科横断的にとらえた学習プログラムを作成し、発展的な学習を展開した。教科学習の中で身につけた知識をもとに視野を広げ、世界の現状と抱える課題を知ることができた。実践を通して、子どもたちは「ビニル袋を使わないようにしなければ海の生き物が死んでしまう」という悲観的な認識から「エコバッグを使えばウミガメをすくうことができる」という、前向きに問題解決をしようとする認識をもつことができるようになった。

また、単元の終末には、子どもたちは「日本ではあたりまえに感じていることを、世界中の人があたりまえに感じられる社会をつくっていくためにSDGsがあるのだ」ということに気付くことができた。このことから、持続可能な社会の有用性に気付くことができたという点では成果が得られたと考える。しかし、学習をすすめる中で「日本の現状は恵まれている」という認識にとどまる子どもが少なからずいた。このことから、「世界の課題は身近で起きていないので自分とは関係のないこと」（以下、タニンゴトと記す）と考えるのではなく、「世界の課題は自分の生活や行動などにかかわりがあること」（以下、ジブンゴトと記す）としてとらえることができなければ、解決にむけて前進することもできないという新たな課題が浮き彫りになった。

子どもたちがふみ出せる一步は小さな一步かもしれないが、その一步をふみ出すきっかけとして世界の課題をジブンゴトとしてとらえることが必要であると考え、本年度は、「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会に参画する子どもの育成」を研究主題として、実践を行った。

2 研究の全体構想

(1) 研究のねらい

本研究は、2030年までに持続可能でよりよい世界をめざすSDGsの理念を、総合学習の中

で「学校全体で持続可能な社会に参画する子どもの育成」をめざす研究である。

今年度は、「世界の課題は自分自身の課題ではないのか」という問いをもてる学習展開とすることで、自分も世界の子どもたちの一人であることに気付かせたいと考えている。そのことから、「タニンゴトをジブンゴトとしてとらえる実践を通して」をサブテーマとした。

また、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会に参画する子どもの育成をすすめるために、子どもや教員間のつながりをより強固にしていくことも必要だと考えている。子どもが継続的に学びを広げ、成長していくためには、学校全体で共通理解をはかり、どの学年の子どもにも発達段階に応じた学びを継続していくことも大切だと考える。そこで、子どもに発信をする土台を広げていくためにも、教員研修の場を設けることも手だての一つと位置付け、実践を行った。

(2) めざす子ども像

世界の課題をタニンゴトではなくジブンゴトとしてとらえることのできる子ども

世界の実情に対して「わたしは恵まれているから」という認識から、「世界に暮らす子どもたちは、わたしと同じ子どもである」という認識に変換する必要がある。それはわたくしが考えるジブンゴトともつながる、「わたしも世界の一人」という当事者意識をもたせることそのものである。

多様な人々と協働して課題を探究できる子ども

世界の課題を日常の学校生活と関連させるとともに、多様な人々と協働することで課題に気づき、その解決策を考えていける子どもたちへと成長していける実践にあたっていきたいと考えている。

(3) 研究の仮説

仮説①

さまざまな協働の場面を設定して他者理解を深めたり、探究的な学習展開を取り入れたりすることで、世界の課題をジブンゴトとしてとらえ、向き合うことができる子どもを育むことができるであろう。

仮説①を支える手だて

- ア ゲストティーチャーの招へい
- イ 級友と考えを交わし合う場の設定
- ウ 参加型の学習方法※を取り入れた学習プログラムによる探究的な活動

仮説②

持続可能な社会をつくるための土台を広げることで、学校全体の子どもたちの探究的な活動に対する意欲を高めることができるであろう。

仮説②を支える手だて

- エ 教員研修の場の設定
- オ 教科横断的なカリキュラムの作成

※参加型の学習方法について

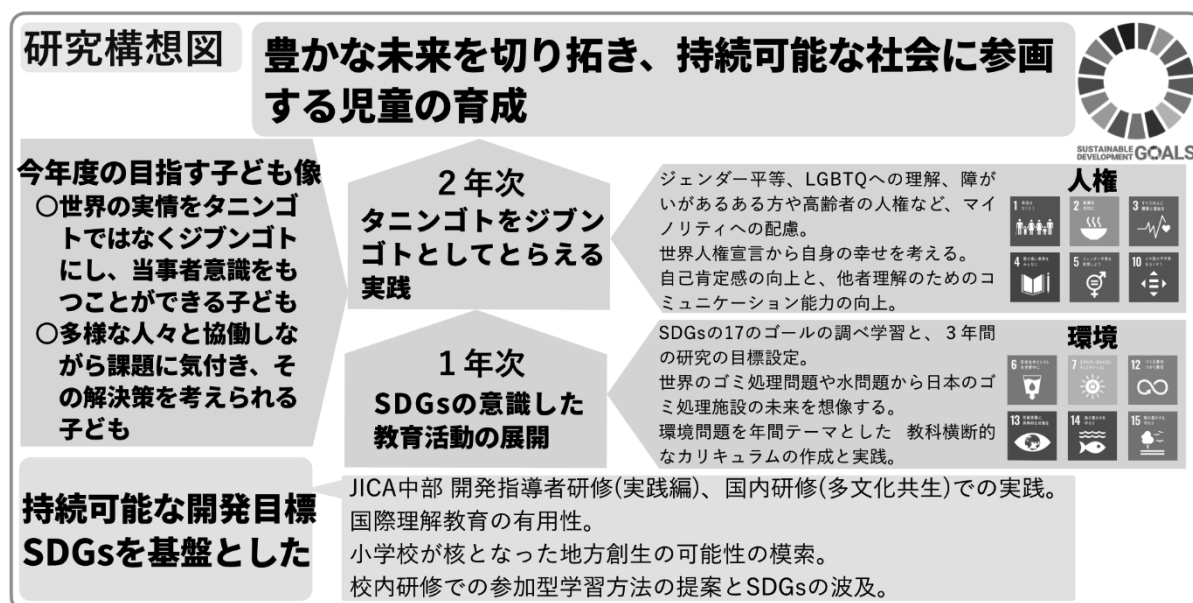
近藤(2019)は、「持続可能な開発の理念を反映する教育方法の検討※」の論中に、『単に知識の伝達にとどまらず、体験・体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチをすることが大切』であること、さらに、『自発的な行動を引き出す「ファシリテート」の働きを

重視することも大切』であると述べている。本実践では、学習者の参加する態度や問題解決するための能力を学び実践するためには、参加型学習方法を取り入れた探究課題を用いることが効果的であると考えられる。

参加型学習方法は、わたくしが JICA 中部主催の開発教育指導者研修（実践編）と教師国内研修（多文化共生）で体験したもので、学習者一人ひとりの経験や知識、意見を尊重し、それらを引き出していくことで、対話的に相互の学びを生み出していく学習方法である。

引用) 近藤牧子. 立正大学教職教育センター年報 第1号 2019 (令和元) 年度掲載論文

(4) 研究構想図



3 授業実践

本校5年生は、総合学習のテーマを人権にしぼって行うことになっている。そのため、ジブンゴトとしてとらえていくための準備として身近で起こっていることを問題として提起するところから始めることにした。

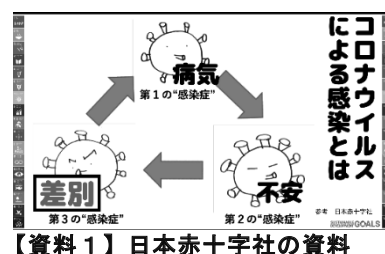
準備実践① コロナウイルス感染症の3つの感染※

「病気」「不安」「差別」の3つの感染があることから、コロナウイルス感染症によって差別を受けてしまっている人がいることについて、日本赤十字社の資料※を使い学習をした。

【資料1】コロナウイルス感染症の感染対策だけでなく、「差別」の感染に加担していかないようにするために、〔行動宣言〕を作成するアクティビティを行い、自分にできる行動を共有する場を設けた。「お母さんが病院で働いていて同じことを言っていたから、自分がそうしないようにしたい」という宣言を発表した子どもがおり、友達に打ち明けにくいことを積極的に発表したことで、学習の深まりを感じる場面を見ることができた。

この実践でジブンゴトとして感染症対策を行っていくことの重要性和、思い込みによって差別・偏見となってしまう難しさを示すことができた。そこで、これから学んでいく人権という言葉の意味を明確に示すために、世界人権宣言について紹介することにした。

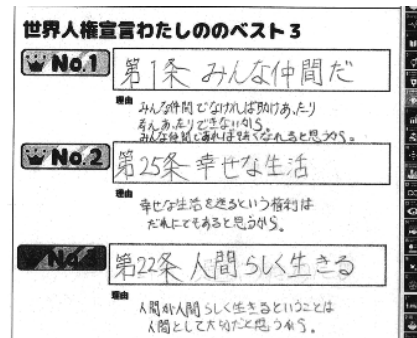
引用) 日本赤十字社. “新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！～負のスパイラルを断ちきるために～”. 国内災害救護に. https://www.jrc.or.jp/saigai/news/200326_006124.html (2021-11-1)



準備実践② 世界人権宣言について知る

アムネスティインターナショナル日本の「世界人権宣言（谷川俊太郎訳）」を使い、世界人権宣言への理解を進めるために、「ランキング」というアクティビティを使った。世界人権宣言の31条の条文から、自分にとって大切だと思うものをベスト3のランク付けをして書き出した【資料2】。その後、ギャラリー方式という共有方法で自分と同じベスト3を探した。この学習によって、人それぞれに大切だと思った宣言が違っていることから、人との違いを受け入れ、人との違いに関心をもつことの重要性を学ぶことができた。また、「わたしたちの『幸せ』を見つけよう」という学年のテーマを示したことで、自分の人権や他者の人権を守っていくことが、「わたしたちの『幸せ』を見つけていく」ことにつながるという意識をもつことができた。

引用) アムネスティインターナショナル日本. “世界人権宣言（谷川俊太郎訳）”. 世界人権宣言. <https://www.amnesty.or.jp/lp/udhr/> (2021-11-1)



【資料2】世界人権宣言ベスト3

本実践① あたりまえはあたりまえ？

ルワンダ村落部の少年の一日※について、「対比表」というアクティビティを使って、わたくしたちの生活との違いについて考えた。さらに、あってもいい違いとあってはいけない違いを考えることで、ルワンダが抱えている問題について迫った。その後、タブレットを使い、16の商品の中からアフリカとつながりがあると思うものを選ぶワークショップを行った。画面共有をすることで、自分と違う考えをもっている友だちと意見交換をすることができた。遠くに暮らす人たちと自分の生活が、知らないところでつながりあることに気付き、他国への関心を深めることができた【資料3】。

特に、10Lの水運び体験を行ったことで、子どもたちが水の問題に対して改善を期待する感想が多く出た【資料4】。しかし、今回の体験によって得られた感想はどれもタニンゴトであり、自身の行動によって解決できる手だてが見つけられない子どもばかりであった。そこで、実際に海外で支援活動を行った経験のある方に出会わせることで、世界の課題を身近に考えさせることができるような手だてを講じることにした。

引用) JICA 地球ひろば. “ルワンダ村落部の少年の一日”. 授業で使えるショート映像集. https://www.jica.go.jp/hiroba/program/practice/education/video/photo/photo_01.html (2021-11-1)

本実践② JICA 中部出前授業「トンガ王国とSDGs」

トンガ王国の協力隊員であった JICA 中部職員に協力を依頼し、トンガ出身のラグビー選手2名と日本でのラグビー選手1名を招待し、スポーツと国際理解と SDGs の関係について授業をしていただいた。自然豊かなトンガが抱える「ゴール7：エネルギーをみんなにそしてクリーンに」の問題についての話や、「目標をもってとりくむことの楽しさ」の話を聞かせ

「アフリカとのつながり」の感想

- ・伊勢海老がアフリカと関係していることがびっくりした。
- ・全部がアフリカと関係していることを知って、おどろいた。
- ・私たちが生活するときに必要なものばかりでびっくりした。
- ・アフリカからもらっているものがたくさんあるから大切にしていかなければならない。

【資料3】「アフリカとのつながり」の感想

「あたりまえはあたりまえ？」の感想

- ・日本は蛇口をひねったら水が出るのに、毎日重い水をもって20分も歩くのは大変だから、早く水道をつくってほしい。
- ・毎日頭に重い水を持たないといけないなんてとてもつらいだろうと思いました。
- ・毎日水を持たなければならいなんて納得できない。

【資料4】「あたりまえはあたりまえ？」の感想

ていただいた。さらに、プロ選手によるラグビー体験も行ってもらい、世界の人たちとのつながりを感じることのできる出前授業となった。

多くの子どもが JICA の支援活動に関心をもったようで【資料 5】、自分が行っている SDGs アクションを続けていきたいと意欲的に述べる子どももいた。世界の問題をより身近に感じることができた子どもばかりで、子どもたちの学びが着実に深まっている実感はあった。しかし、「トンガに対する関心が高まった」「がんばってほしい」「勉強になりました」【資料 6】という感想にとどまり、ジブンゴトとして行動に移す段階にはならなかった。そこで、トンガのラグビー選手が話してくれた「今後の展望や夢」「幸せを感じる」という実際に聞いたことを題材にして次の実践を行うことにした。

本実践③ 「わたしたちの幸せって何だろう」

本校の子どもの考える幸せについて類型化するために、〔カード式整理法〕というアクティビティを使った。その後、類型化された「自分たちが幸せに感じている項目」と、「ルワンダの人々やトンガの人々にとっての幸せ」を比較するために、〔対比表〕を使った学習を行った。わたくしたちにとっての欠かすことのできない幸せと、ルワンダやトンガに暮らす人たちのとの幸せは、類似していることに気付かせることで、同じ地球に暮らす人間であることに気付かせることができた。また、最後に〔指標づくり〕というアクティビティを使い、「わたしの幸せ 3 か条」を作成させ、自分だけでなく世界に暮らす同じ人を思いながら考えさせることができた【資料 7】。

今回の実践によって、トンガやルワンダに住む人も同じ地球に暮らす人間であることに気付けたことで、世界の課題について学んでいくことの意味を考えさせることができた。また、自分ができることを行っていく意欲につなげることもできた。そこで、身近なことに興味をもっていくことの必要性をより体験させるために、次の実践を行うことにした。

本実践④ 「わたしとあなたの違い」で他己紹介

他者への関心を深めることが他者理解の第一歩であることを学ぶとともに、コミュニケーションスキルを養うことが良好な関係を築くことができることに気付かせるための学習を行った。まずは、自分の好きなものや好きなことを、〔分配円〕というアクティビティを使って、項目ごとに割合を示しながら記入した。その後、成果物を交換し、インタビューしないというルールのもと、好きな理由を予想しながら他己紹介の台本づくりをした。「きっとこうだろう」という他己紹介と、「本当はこうなんだよ」の答え合わせの自己紹介によって、「もっと知りたい」という思いと「もっと知ってほしい」という思いをもつことができた。この実践によって、他者との距離を縮め、相互理解を図ることができた。

この実践によって、世界の人々と結びついていくために「わたしとあなた」というつながりを深めることが、班員とのつながりや学級とのつながり、学年とのつながりといったような、コミュニティを広げることに気付かせることができた。この成果は、少しずつコミュニティを広げていった先にある世界とのつながりを考えさせるきっかけになり、世界の課題解

自分の気持ち	理由
すごい	JICAの活動で150カ国を回ったなんてすごいと思ったから。
がんばりたい	JICAの人たちもSDGsに取り組んでいるから、私も同じようにがんばりたい気持ちがある。
もっと知りたい	トンガの国の生活が、JICAの人の活動をもっと知りたいと思う。

【資料 5】出前授業の振り返り①

②今日、勉強になったことを教えてください。

日本で当たり前だけど外国では当たり前じゃない国な
どがたくさんあるということ、世界中にJICA海外協力
隊が活躍して運動が勉強を多々しているということが
勉強になりました。

【資料 6】出前授業の振り返り②

①地球があること	①学校に行けたとき
②生まれてきたこと	②戦争がなかったとき
③家族がいること	③SDGsが達成された時

【資料 7】わたしの幸せ 3 か条

決の第一歩とすることができると考える。

次の実践では、1か月後の学校行事をテーマに設定し、実生活で起こりうるシーンを切り取ることで、他者理解の重要性を考えるとともに、多様な課題をジブンゴトとして考えやすくなるような学習を行うことにした。

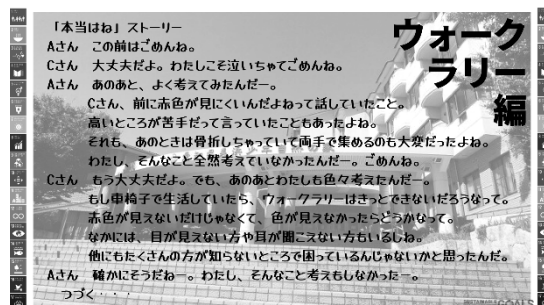
本実践⑤ わたしたちの自然教室

11月に行う自然教室が、本学年91名にとって「誰一人置き去りにしない」学年行事にできるように、さまざまな場面で考えうるマイノリティへの配慮を考える学習を行った。「ウォークラリー編」「キャンプファイヤー編」「夕食バイキング編」「夜のお楽しみ会編」の4場面を切り取り、台本の通りに演じさせた。その後、それぞれの台本に書かれたセリフから、マイノリティへの配慮がたりなかったという場面を探すために、[ブレーンストーミング]と[対比表]によって、問題点と解決策を考えさせた。障がいのある方々の人権や多文化共生の認識、ジェンダー平等やLGBTQへの理解を促すことで、誰一人置き去りにしない社会をめざすうえでマイノリティへの配慮の重要性を考えさせることができた【資料8】。最後に配慮がたりなかった場面を自分たちで台本を書き換えて[ロールプレイ]を行った【資料9】。業後の振り返りの中では、特に「ウォークラリー編：障がいのある方に対する配慮」で子どもたちの変容を見ることができた。ふりかえりには、実践④で学んだ他者理解の重要性を書く子どもや、障がいのある方と私たちは変わらないのだという共生社会の必要性を書く子どももいた【資料10】。多くの子どもが、多様な事情や考えをもつ他者と共存していくために、他者と積極的にかかわっていくことが大切であることに気付くことができた。

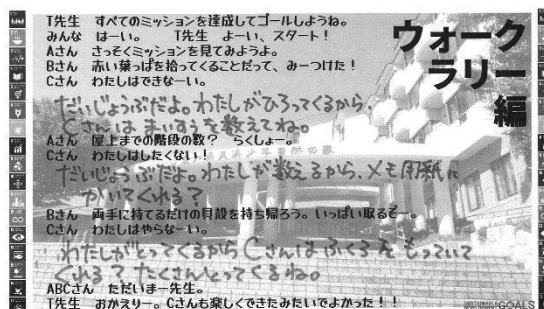
本実践は、実際に起こりうるかもしれない状況を想定した実践であったため、ジブンゴトとして考えやすい学習になった。【資料10】のような感想をもつようになったことは、子どもたちがジブンゴトとしてとらえることができたことによる成果であると考えられる。子どもたちがこの学習で学んだことをいかして、家族や学校、地域の人たちとともに、持続可能な社会をつくっていく一人になることを願って、今後も実践を続けていきたいと考えている。

4 教員研修の実践

SDGsと参加型学習方法の紹介を目的に学習会【資料12】を設けた。本学習をすすめていく上で必要なさまざまな情報を共有するとともに、参加型の学習方法を授業に組み込んだ学習プログラムを構築していくことができるように、教員研修を定期



【資料8】支援を考える資料



【資料9】新しい台本

「ウォークラリー編」の感想

- ・「本当は…」のストーリーを聞くと、人のことを知ることは大事なんだと思いました。
- ・世界にはいろいろな人がいることを知りました。私も松葉杖を使っていたことがあるので、恥ずかしいことではないことを知りました。
- ・体に障害がある人も同じ人間で、人と寄り添いながら生きていくと思いました。

【資料10】「ウォークラリー編」の感想

学習会の実践(一部)

- ① SDGs アクティビティの紹介
テーマ「SDGsについての説明とアクティビティの体験会」
- ② [カード式整理法]の体験
テーマ「わたくしたちが幸せを感じる瞬間は」
- ③ [ランキング法(みんなのベスト3)]
テーマ「これが大切、世界人権宣言」
- ④ [対比表]
テーマ「あつていい違いとあつてはいけない違い」

【資料12】実践内容

的に行った。

本実践に賛同した職員が、さまざまな学習を構築し、実践した。一部を紹介する。

(1) 1年生の実践「SDGs ってなに？（特活）」

クイズを通して、SDGs について肯定的に出合う実践を行った。SDGs の「ロゴが何個あるか？」や「何色に分かれているか？」や「SDGs を何と読むか？」などの簡単なクイズや「みんなが何歳になるまでの目標？」や「誰の目標？」などのクイズを通して SDGs について知ってもらう活動を行った。誰でも正解できるクイズにしたことにより SDGs に肯定的に出合う姿が見られた。また、SDGs 推進大使の動画や国連が配信している子ども向けの動画などを活用することで、より肯定的に出合うことができるように工夫した。さらに低学年の子どもでも伝わりやすい動画教材を活用することで、貧困や飢餓などの言葉やイメージを伝えることができた。

(2) 2年生の実践「世界の子どもは、今、何してる？（生活科）」

絵本の読み聞かせによって、多様性について考える学習を行った。「ブルキナファソ」の生活事情が紹介されている絵本では、子どもたちのくらしや学校について考えることができた。その後、ブルキナファソの生活の実情や環境について似ているところと違うところを〔対比表〕で考えさせた。事後の振り返りでは、「困っている人を助けてあげたいけれど、遠くだから助けられない」「きれいな水やごはんを届けてあげることができないかと思いました」と自分たちにできることはないか考える意見が出た。

(3) 3年生の実践「ルワンダ村落部の少年の一日」

5年生で行った実践を3年生用に言語の支援を増やして実践を行った。その後、世界に目を向け始めた3年生に、もっと肯定的に他の国の文化にふれさせたいと考え、東京オリンピックが開催されるこの機会を生かして、世界の国の良さに目を向けさせたいと考えた。そこで、オリンピックの応援サイト※を利用していろいろな国を知る活動を行った。このサイトには、その国の応援エールと国のよさが動画で紹介されているので、いろいろな国に興味をもって調べることで、よさに目を向けさせることができた。

今後は、自分たちが興味をもった国の SDGs の課題について調べ、その課題と自分たちの生活のかかわりを話し合ったり、自分たちにできることを探したりしていく予定である。

※ NHK for school. “世界を応援しよう”. <https://www.nhk.or.jp/school/cheer/>
(2021-11-1)

(4) 4年生の実践「人と環境」

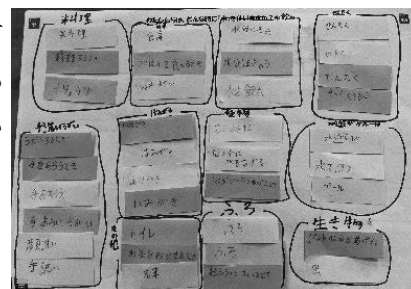
昨年度作成した教科横断型のカリキュラム【資料13】にそって実践をしている4年生は、昨年度の反省点を生かしながら、カリキュラムの改善をすすめている。



【資料13】4年生の教科横断型カリキュラム

また、「くらしをささえる水」の単位では、参加型の学習方法を取り入れており、「どんなときに水を使うか？」について〔カード式整理法〕というアクティビティを行うなど、多くの実践を行っている【資料14】。浄水場の映像を見たり、ろ過の実験を実際に行った

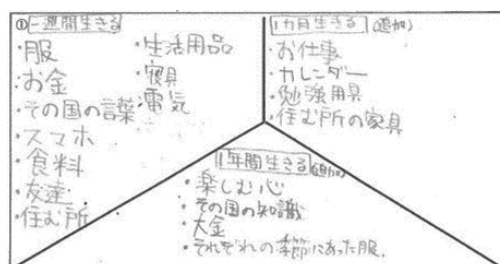
りするなどの教科横断的な活動を通して、水をきれいにするためには多くの工夫が必要であり、安全・安心な水があるということはあたりまえではないということを気付いた。単元のまとめとして、学んだことを新聞形式に表し、友達と読み合ったことで、水の大切さをより強く感じることができた。



【資料 14】 成果物

(5) 6年生の実践「難民問題」

修学旅行で自国について知る→外国と肯定的に出会う→問題について知るという流れで学習を組み立ててきた。ジブンゴトとして考えたり、自身の考えを整理したりするためにアクティビティや思考ツールを取り入れた。[難民のカバン]というシミュレーションゲームを通して必要な持ち出し道具を考えた。その後、難民の避難場所や避難後の生活、日本の難民受け入れ状況などについて学習した。[思考ツール：Yチャート]を活用し、「1週間生きる」「1か月生きる」「1年間生きる」と避難所で生活するのに何が必要かを考えた【資料 15】。それぞれの期間を見て真剣に考え、期間ごとに必要なものが違うことに気付くことができた。期間を指定して考えたことで、「難民の状況がいつまで続くかわからない」という不安と隣合わせであることを実感することができた。



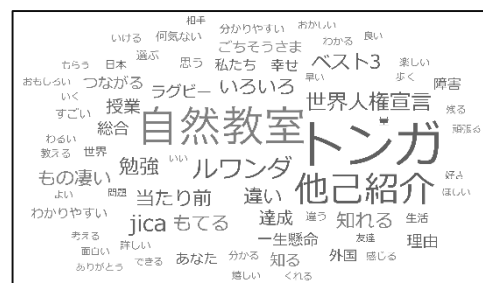
【資料 15】 避難所生活のYチャート

(6) 特別支援学級（なかよし学級合同）での実践

特別支援学級では、子どもの実態に合わせた、2つの「SDGs 学習」教材を考えた。初めに「SDGs のアイコン絵合わせカード」を使ったゲームを行った。ゲームを通した「SDGs 学習」により、抵抗なく、興味をもってとりくむことができた。2つ目は「世界の困ったことカード」を使ったゲームを行った。交流学級で「SDGs 学習」に参加している子どもも多いため、「17 の目標」を理解しやすくするために考案した。それぞれの目標の説明を「こんな困ったことがあるよ」の視点の簡単な言葉に置き換えたことで、身近な問題として感じることができた。そのため、給食の時間には、教室掲示をしてあるカードをさしながら、「残すのは、もったいない」とつぶやく子どもも出てきた。子どもの実態に合わせた教材を工夫することで、意欲的に学習に臨むことができた。

6 実証・考察

人権をテーマに学習してきた 10 月までの学習の振り返りを行いつつ、「津島市の未来のために役立つ学習であったか」というテーマでアンケートを行い、子どもが関心を寄せている学習を、ワードクラウド【資料 16】を利用して整理した。テーマの出現頻度をもとに考察を行っていく。



【資料 16】 未来のために役立つ学習

(1) 「トンガ」について

スポーツと国際理解と SDGs の関連を体験しながら学ぶことができた経験により、多くの子どもが関心をもっていることが分かった。このことから、紙面や動画教材を題材にした学習に比べて、実際に国際問題に貢献している方の話をもとに行った学習は効果が高い

ことがわかる。また、事後学習の中で、国際協力を仕事にしている方への関心をもつ子どももあり、JICA 海外協力隊に興味をもち自発的に調べ学習を行う子どもまでいた。今後は、在籍する学校が実践したマラウイ共和国のンサナマプライマリースクールとのオンライン国際交流授業の経験を生かし、体験的に学習に臨める場を提供していくことが大切であるとする。また、一度という経験で終わるのではなく、定期的に学習内容の交流を行う場をつくることで、新たな気付きや学びの深まりを図ることができるのではないかと考える。

(2)「自然教室」について

今後の学年行事である自然教室の事前学習において、マイノリティへの配慮を具体的に考えることで、「誰一人置き去りにしない」という SDGs の理念を理解するとともに、自分たちにできることはないかと考えることができたようである。とくに、ウォークラリーでおこなうミッションは選択制にすることで、グループの特性に合わせたミッションを選ぶことができるように提案する意見が生まれ、学習の深まりを感じることができた。今後は、マイノリティへの配慮を具現化していくために、配慮の方法や支援のあり方を福祉実践教室での学習を絡めて学習に臨ませることで、さらなる学習の深まりをめざしていきたいと考えている。

(3)「他己紹介」について

身近なコミュニティに関心をもつことができた子どもが多くいることがわかった。共生社会を築いていくためには、身近なコミュニティに関心をもち、少しずつ広げていく必要があると考えている。共同体感覚を養うことができたことで、多様性の尊重というキーワードに迫っていくことができる可能性を感じた。多様性を尊重できる子どもを育成し、共生社会を創造することのできる子どもの育成をめざしていくためにも、実践として行った他己紹介を今後も活用していきたい。

(4) 教員研修について

定期的に行った学習会を行う前後でアンケート【資料 17】を行った。1 回目の学習会でを行ったアンケートには「学習活動の中でどのように SDGs を取り入れたらいいのかわからない」という意見や、

「参加型の学習方法をどの場面でとりくめばいいのかわからない」という意見が多かった。それが、半年後に行ったアンケートには、【資料 17】のような感想をもらうことができた。今後も子どもに発信をする土台を広げるために、教員研修を続けていきたい。

学習会のアンケート(事前□→事後○)

- 世界の課題を低学年の児童に考えさせるのは難しい。
→○ 項目をしぼって対比表を行うことで、低学年の子どもでも考えやすい内容に変えられることが分かった。
- 日本が幸せ、日本が優れているという感覚になりそう。
→○ 自分の身の回りの問題から解決させていけるような学習にすることで、子どもたちにジブンゴトとして考えさせることができると思う。

【資料 17】教員の変容

7 まとめ

ジブンゴトとしてとらえる学習プログラムによって、子どもたちは課題に関心をもつだけでなく、自分たちにできることを意欲的に考えるようになった。そのことから、次年度は、子どもたちが世界の課題に対して、試行錯誤を粘り強く考え続けることのできる力を育んでいきたいと考えた。「住み続けられる街づくり」というテーマで、自分たちの住む地域のよさに気付くだけでなく、地域の課題に対して当事者意識をもって深く考え、地域のためにできることをプロジェクトしていくことのできる子どもの育成をめざしていきたい。豊かな未来を実現するためにも、わたくし自身が一步を踏み出すことで、子どもたちに勇気を与えていければと思っている。

IV 本年度のまとめと今後の課題

1 本年度の課題に対するまとめ

(1) めざす子どもの姿に迫るための、年間を通した教科横断的なカリキュラムの作成

実践研究からも、教育研究愛知県集会での報告内容からも、各学級において目の前の子どもたちの姿からカリキュラムを創造し、「ゆたかな学び」が展開されていることが分かる。学校や地域の特色を生かして年間を通した単元を構想したり、教科での学びを起点としてより深く探究したい事柄を見出して探究課題を設定したりするなど、総合学習の特色をふまえて各学校でカリキュラムが自主編成されている。

しかしながら、教科の内容と関連させたカリキュラムを作成して職員で共有することや、学年や小・中学校を超えた継続的な実践としていくための体制づくりなどについて、今後さらに検討していく必要があることが明らかとなった。また、高等学校でのより高度な探究学習につなげていくために、先を見通したカリキュラムの作成も必要であることが確認された。

(2) 探究を継続させるための、探究の過程を意識した授業展開の工夫

総合学習においては、「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という探究の過程に沿って探究活動を設定し、学びを深めていくことが重要である。本年度報告された実践の大きな特徴として、ICT 機器の効果的な活用が探究の過程をさらに充実させているという点があげられる。コロナ禍という状況もあり、オンラインでのゲストティーチャーとの交流や、アプリケーションを介した協働学習などによって、「情報収集」や「整理・分析」の過程を充実させている実践がいくつも見られた。また、「整理・分析」や「課題設定」の場面において「思考ツール」を効果的に活用している実践も報告されている。

しかしながら、ICT 機器や思考ツールを効果的に使うためには、活用するスキルを高めなければならない。そのための時間をどのように生み出し、取り組んでいくのか考えていく必要がある。また、SDGs など、あまりに広いテーマで学習を進めていった場合、課題をどのように焦点化していくべきかという課題も見えてきた。

2 今後にむけた課題

以上のことをふまえ、今後にむけた課題を以下の3点にまとめた。

- (1) 探究的な学びを実現する手段としての ICT 機器や思考ツールなどの有効な活用のあり方
- (2) 今日的な諸問題の根本的要因に迫ることで、社会変革につながるような深い学びの実現にむけた授業展開の工夫
- (3) より高度な探究学習につなげていくためのカリキュラムの作成

今後も「ゆたかな学び」の実現にむけた教育課程編成にむけ、研究を深めていきたい。